

B型，C型肝炎ウイルス重複感染肝硬変症に 化膿性脊椎炎を発症した1例

わた なべ よう へい¹⁾ あか ぎ しゅう じ²⁾
渡 辺 洋 平 赤 木 収 二

キーワード：化膿性脊椎炎，HBV・HCV 重複感染，肝硬変症，
抗菌療法，抗ウイルス療法

要 旨

症例は，50歳代男性。B型・C型肝炎ウイルス重複感染肝硬変症の抗ウイルス療法を目的に入院加療をうけ，その後ウイルス学的著効状態が継続している。しかしながら，経過観察中，化膿性脊椎炎を発症。抗生剤による治療を行い，一旦は回復したが再発をきたし，再度の長期にわたる抗生剤投与により，症状，検査所見ともに改善状態が持続している。しかしながら，化膿性脊椎炎増悪時には，腹水貯留，肝予備能の悪化が観察された。化膿性脊椎炎は，肝硬変をはじめとした易感染性をもたらす基礎疾患に発症する可能性が高く，本症例のように，そのコントロールが不十分な場合，患者の予後を悪化させる可能性が示唆された。したがって，このような基礎疾患を有した症例では，患者の予後向上のため早期発見及び適切で速やかな抗菌療法が不可欠であり，化膿性脊椎炎を念頭においた診療が，臨床上重要であると考えられた。

はじめに

近年の各種抗ウイルス剤の開発をはじめとした治療法の進歩により，いわゆる“end-stage liver disease”である肝硬変症の予後の改善がみられる^{1,2)}。一方，人口の高齢化や肝硬変症をはじめとするいわゆる“compromised host”の増加とともに，化膿性脊椎炎症例の増加が指摘されてい

る^{3,4)}。今回，われわれはB型肝炎，C型肝炎両ウイルス重複感染肝硬変症例の治療，経過観察中に化膿性脊椎炎を併発した症例を経験したので報告する。

症 例

症例：50歳代，男性。

主訴：全身倦怠感。

既往歴，家族歴：特記事項なし。輸血歴：なし。

現病歴：22歳時，肝臓病を指摘され約5年間で内服治療（詳細不明）を受けるもその後放置。平成16

Yohei WATANABE et al.

1) 浜田医療センター整形外科 2) 大田市立病院内科
連絡先：〒697-8511 浜田市浅井町777-12